

「私とジェンダー」をテーマに
毎回様々な切り口でコラムを
掲載しています。

ジェンダーと私

なんぶ・ひろこ

・CAPみしま・大阪事務局
・高槻ドキュメンタリー映画
上映委員会 メンバー

NPO法人 SEAN
理事
南部 裕子

私は今、結構楽しく生きている。日々の生活の中で、もちろんお腹が立つこともあるし、悲しいことや辛いこともあるが、仕事は楽しいし、いろんな人と出会い、多くの人に助けられ、今ここに生きていることが幸せだなあと思う。一昨年、大好きだった妹が突然亡くなって以来、特にそう感じるようになった。

しかし様々な暴力や差別、貧困の中で、不安や恐怖を抱えながらそれでも必死で生きている人たちもたくさんいる。

誰もが安心して暮らせる社会、安心して生まれ育ち、そして老いてゆける社会、そんな社会になればいいなあと思う。

* * *

私は子どもの頃から、この社会は何かおかしいと感じていた。

「女より男のほうが上」という考え方がありますが、私にはとても不思議であり不愉快だった。小学校の名簿はいつも「男子が先、女子は後」、友だちの家に泊まりに行くと「お風呂に入るのはお父さんから」等々。

当時の私は、勉強でも運動でも男子に負けることがなく、また我が家では熱いお風呂が好きな私がいつも一番に入っていたので、「外」の世

界はほんとにカルチャーショックだった。

父も母も自分が子どもの頃に受けた家制度の中の期待や抑圧が窮屈で、それを自分の子どもたちには味合わせたくないとの思いがあったのだらうと思う。「女の子だから」とか「うしろなさい」とは全く言わず、私は自分のことはすべて自分で決めてきたし、自分の感じていることは正しい、私はこのままでいいと思つて生きてくることができた。

もう二人とも亡くなってしまつたが今でも「自分がされていやなこととは他人にはしないようにね。困ったときはいつも誰かが助けてくれるよ」という母の言葉と、父親の「自分が楽しいと思えることは何でもやってみたらいい」という言葉がずっと私の中に残っている。

私は十九歳まで米軍基地のある佐世保という街で育ち、京都で四年間学生時代を過ごした。時代の影響もあるだろうが、その頃は平和や政治に関心は持ちつつも自分が社会を変えていくというほどの気力はなく、自分だけは取り込まれずに生きていこうと思っていた気がする。

マルクス主義を学んでも聖書を読んでも、「そこには女性の人權」と

いう視点がないと物足りなさを感じながら、何気なく日々を過ごしていた頃、落合恵子さんの本「ザ・レイプ」に出会い、女性差別の考え方が女性への暴力を生み出し、また容認していくのだと改めて認識し、女性たちが安心して暮らせる社会にしたいという思いが沸々と湧いてきたのを覚えている。

* * *

もう二十年も前の話になるが、私は子育てでも介護もほんとにいつぱい人に助けられ支えられてやってこられたと思う。あの頃、私が必要だと思っていたことを、今「とんがらし」のみなさんが提供していることをとてもうれしく思っている。

私の場合は、子どもを持ったおかげで「何かやらなくちゃ」という気力も出てきたし、何より子どもを通してたくさんの人との出会いがあった。平和・環境に関わる市民運動、そしてPTA。この頃、遠矢さんとの出会い「かまどねこの会」を作り新たに「女性問題」を勉強しはじめることになった。(あの頃は二人とも若かった！私もとても勇ましくて？「PTAを変えられなければ、社会なんて変えられるはずがない」なんて頑張ってたなあ。)